

「只見 移住物語」

南郷トマト農家

【移住者のご紹介】

- ・お名前：高木 ^{たかぎ} 正貴 ^{まさたか} (52 歳)
- ・ご家族：純子様 ^{じゅんこ} (妻)、長女(独立 神奈川県 在住)、長男(独立 福島市 在住)、
クー (柴犬-14 歳)
- ・いつ：平成 16 年 4 月
- ・どこから：神奈川県 厚木
- ・どこへ：只見町 大字 坂田
- ・いましていること：トマト農家
- ・まえにしていたこと：公営企業 サラリーマン



ご自宅の前で 高木正貴様

【始まり】

移住する前の生活はサラリーマン、残業もあるごく普通のサラリーマンでした。転勤族だったので本社 東京、大阪や、札幌にいたこともありました。最後の勤務地は横浜でした。

移住を考えた理由は、昔から植物を育てるのが好きだったからです。農業を考えていました。植物を育てることに関係のない会社に勤めましたが、会社務めしているときも市民農園を借りて植物の生育に携わっていました。36歳あたりの頃でしたか、自分の好きなことを仕事にしたいと考えました。会社が嫌になったと言うのではなく、両方はできないので、どちらかを選ぶなら農業をしたいという思いが固まり、会社を退職しました。

【家族】

家族が4人いての一大決心です。嫁さんへの相談はしていました。私が昔から農業が好きだと言うことを知っていたので「いずれそのような話にはなるだろう」とは思っていたようです。「農業をするのなら一緒にやるしかない」と賛成してくれました。今でも家族の理解がなければ「これは絶対にしてはいけない事だ」と思っています。

移住した時に、上の娘は小学校2年生、長男は幼稚園の年長で状況がよくわからないと言った感じでした。転勤族でしたので引っ越しはそれまでもありましたが、子供たちが田舎の環境に馴染めるのかについては心配しました。

いざ来てみると嫁さんを含め、家族みんなが地域に旨く溶けこめたと思います。この理由は周りの地域の人が、皆さんよくしてくれたお蔭だと理解しています。上手に生活させてもらっているのだと感じます。このことはとても大きなことで、これが旨く行くか、行かないかで、営農も順調に進む、進まないに関連してくると思います。

【準備】

会社務めしていたころから、いわゆる「田舎暮らしの本」を読んでいたのですが、本格的に農業をしようと活動を始めたのは最後の2年間くらいです。土日に地方へ出向き、県庁とか市とか、町役場から直接話を聞きました。どのような土地か訪れ、補助金の条件などの情報を集めました。

各自治体でIターンなど受け入れをしていたので、いろいろなところへ見学に行きました。新潟、長野、群馬などです。例えば群馬ならハウレンソウ産地、長野なら薬物レタス産地などで受け入れをしていました。群馬のハウレンソウ産地では、2代目への引き継ぎが進み、空き農地がないという話。また高崎の奥にあるK村では、自営自作したものを産直して生計を立てている人がいるという話も聞きました。

ただ自分には農業のノウハウも、販売ルートもありませんでしたので、「自分で好きなものを作っていいですよ、さあどうぞ」と言われても生活できません。やはり農業をするのであれば組織なり、販売形態がしっかりしているところを選ぼうと考えていました。

南郷トマトとの出会いは、福島の実験場でフェスティバルがあって、その中に就農相談コーナーがあり、そこでトマトなら受け入れてくれるところがあると紹介を受けた事が始まりです。ただ当時の旧南郷村はいっぱいだったので、隣の只見町なら空きがあるのではないかと言われ只見町役場へ行きました。それまで私は只見と言う土地の名前すら知りませんでした。南郷トマトの話聞き、訪れた先々の条件とも見比べ、只見町が一番整っているので決断しました。

只見町との話しが整い、正式に受け入れが決まると、役場で住居を紹介してくれました。その家を借り、しばらくして家主さんから売ってもらい、2012年にいまの家に建て替えました。

【現在】

トマトの他には自給用にお米を作っています。

この2年間は冬季間何もしていませんが、それまではスキー場のリフト係として働きました。「只見特産(株)」と言う山菜工場でも働いたこともあります。

妻は、夏は一緒にトマト作りをし、冬は看護師として働いています。



高木さんのトマト圃場 全景

【変化】

移住して良かったと感じることは、当然 経営者として自分の裁量で好きなようにできるのが良いところです。ここがサラリーマンとは違いますが、一方自己責任という不便もあります。

【将来】

子どもも独立し、経済的な目途もある程度立ってきたので、規模の拡大は考えていません。ただ、密度を濃くすることを考えて行きたいです。効率を上げるというか、収量より収益を増やせるようなことを考えています。

【不便】

暮らし始めて困ったことは、物理的な不便さは否めないと思います。何か物が足りないと言ってすぐ買いに行くとしても、最低でも田島へ行かないと手に入らない事です。都会ならすぐ近くにホームセンターがあり買えます。いまはネットも発達していて、ネットで購入することもできますが、どうしても1日~2日はかかってしまうので、時間とコストの不便さを感じます。

あと医療です。いまは健康で何も問題はありますが、ここが少し心配です。

【健康】

健康面で注意していることは、お酒の適量を守っています。
都会から来れば、ご飯と水と空気の違いが分かりますね。
ご飯がとても美味しいのです。

歩くように心がけています。自分は、冬場 四国遍路を歩いています。
四国お遍路八十八か所を1回歩き、2回目は自転車で行きました。
冬は自由な時間があるというのが、ここの良いところではないでしょうか。

【アドバイス】

田舎に来たら好きな事が出来るかという、そうではありません。やはり周りときちんとした関係を築く努力を重ねないと孤立してしまいます。このことを理解して、実行できない方は、田舎に来てはいけないと思います。よくありがちな田舎というイメージで、移住してくると、違った時の落差は大きいです。

田舎暮らし=農業とは決めつけしないで下さい。農業でなくても、工場勤めもできますし、自分のスキルを活かして自営も可能です。農業がやりたくて、田舎暮らしというのはあり得ますが、田舎暮らしのツールとして農業といった短絡的な考えでは失敗してしまいます。田舎で暮らすために農業をするという気持ちでは、農業に手を出さない方が良いです。

農業はそんなに簡単ではありません。

本当に農業をしたいなら、自分たちは歓迎します。その覚悟というか、決意があって初めて、農業に入ってきて欲しいと思っています。

【生活】

ご近所とのお付き合いで、心がけることは「挨拶」です。「おはようございます」は当然ですが、そこにもう一言付け加えると良いと思います。「暑いですね」でも、「今日は雨が降るのですかね？」でもいいです。プラス、もう一言が、大切なのです。

当然 普請(集落の 共同作業)には参加するように心掛けて下さい。

【印象】

移り住んで驚いたのは、都会の人間関係の密度とは違うという事です。最初は、誰でも戸惑うかもしれませんが「この地域はこのようなもの」と、心の間口を広く開けると良いと思います。都会感覚で、すべてプライバシーがどうのこうのと言い始めると、それは正しいことかもしれませんが、気疲れしてしまいます。

都会でいたときの感覚とはやはり違う。当然 土地が違えば違うのだと、文化も違うわけで、それに驚いても、それにあまり引きずられてもいけない。地域に溶け込み旨くやって行こうとするなら、この様なものだと受け入れる事がいいと思います。ただ無理して溶け込もうとしても疲れてしまうので、その塩梅が大切だと思います。

移住したら、なんでも話ができる地元の方を早く見つけることを勧めます。お酒を一緒に飲んでくれる人でも良いし、世話を焼いてくれる人でも。最終的に頼れる人がいることが、外から来た人には本当に心強い事だと思います。外から来た人同士で集まるのも良いですが、やはりこの地域で育った人が身近にいと、この地域でうまくいくノウハウを、色々とアドバイスしてくれると思います。

2020年6月15日 ご自宅にてインタビュー

インタビューアー 移住コーディネーター 生天目 博